

2 大学と大学図書館

著者	大隅 典子
内容記述	研修：令和元年度大学図書館職員長期研修 主催：筑波大学 期間：令和元年7月1日～7月12日 会場：筑波大学春日エリア情報メディアユニオン2階メディアホール等
発行年	2019-07
URL	http://hdl.handle.net/2241/00157192

令和元年度大学図書館職員長期研修講義
「大学と大学図書館」

令和元年7月1日（於 筑波大学）

東北大学副学長（広報・共同参画担当）
附属図書館長
大学院医学系研究科 教授
大隅 典子

1. 二年目の図書館長として、感じること

ご縁があって東北大学附属図書館長を拝命してから、あっという間の一年でした。野家元館長、植木前館長と異なり、いわゆる「理系」の教員が館長に就任することで、図書館員の皆さんに戸惑いもあったのではないかと思います。お陰様で暖かく迎えて頂いたことを感謝しています。

社会全体の電子化やインターネット化によりアカデミックキャピタリズムが進行する中、長きにわたり智の府を担ってきた図書館は、今後も良心の要であるべきと思います。とはいえ、大学附属図書館として、オープンアクセス（OA）への対応は喫緊の重要な課題であり、ただし、図書館の問題であると同時に、研究者自身にもっと考えてもらう必要があるでしょう。研究者と図書館員を繋ぐことができたらと思っています。そのため、本年度前期の間に、全6回の「学術雑誌の動向に関するセミナー」を行い、本学各キャンパスで教員の理解の推進を図っているところです。

本学では、やや遅れたものの、学内の「Bring Your Own Device (BYOD)」化を本格的に推進するフェーズになりつつあります。主に外国語科目におけるCALL端末の代わりに各自のPC等を利用することを皮切りに、数理・データサイエンス関連科目での利用、学内のラーニングマネジメントシステム（ISTU）を利用した講義配布資料の電子化等を推進する予定です。昨年発表した「東北大学ビジョン2030」でも、図書館機能の高度化が盛り込まれており、対応していく必要があります。とくに、我が国全体で日本語の教科書の電子化を推進するよう、出版業界に働きかけることも重要だと考えます。講義資料については、オープンにしても良いものであれば、電子媒体として機関リポジトリで公開することも推進していきたいと思っています。

2. 一（いち）生命科学研究者として、図書館に思うこと

小学生の頃、図書館にある本を片端から読みました。司書さんや古書店の店長にも憧れたくらいなので、図書館の仕事に関わることになったことを有り難く思っています。とはいえ、一昨年度まで、一（いち）生命科学研究者として大学図書館は空気のような存在でした。そこに書籍や雑誌が備えられているのが当たり前、たいていの雑誌が電子版で読み放題なことに何の疑いも持たなかったのです。

図書館長を務めることになり、電子ジャーナルの価格交渉に図書館員が努力している実態を知りました。また、去年は SPARC Japan セミナーで講演の機会を頂き、生命科学分野の商業化が進んでいることや、生命科学研究者が激しい競争に曝されていることについてもお話しさせて頂きました。

基本的に裁量労働制を取る研究者の中でも、とくに生命科学分野は労働集約型なので、現場で実験や分析を行う研究者は、研究以外のことに時間を割くのを好みません。そのような立場からは、図書館業界が中心となって、ぜひ上手く日本の OA 推進を進めて欲しいと願うばかりです。

3. 広報担当副学長として、図書館に言いたいこと

これまた小学校の頃の思い出話ですが、絵日記を書いたり、学級新聞を作るのが好きな子どもでした。中学では生徒会長立候補のための選挙運動（の真似事）を行い、キャンペーンの標語を考えたり、ポスターを掲示したりしました。高校では文化祭委員として、企画のプログラムを考え、近隣の住宅に「毎年うるさくしてすみません」の挨拶をし、商店街を回って広告掲載をお願いしました。……という訳で、広報担当には向いているキャラクターだと思います。

東北大学の HP は、日本語と英語のつくりが全く異なります。日本語はどちらかといえば「ポータルサイト」的な運用になっており、毎日のように掲載されるプレスリリースのお知らせが中心ですが、英語サイトでは専門のネイティブライターによる読み物としての記事を載せています。今後、日本語の方も研究者をフィーチャーした連載を開始する予定です。また、広報誌も、より広いステークホルダーに訴求するものに変えようとしています。SNS 発信が重要であることは言うまでもありません。

図書館広報も、図書館関係者の中で閉じることなく、広報誌、ウェブ、SNS 含め、より広くアウトリーチしていくよう常に心がけて頂きたいと思っています。

4. 共同参画担当副学長として、図書館に言いたいこと

共同参画に関わるようになったのは、本学に教授として着任した 20 年前からのこととなります。昨年、医学部入試における女子差別が大きく報道されましたが、自分の大学入学当時は、分野によっては女子が少なくても当たり前という時代でした。それが、40 年経っても意識がほとんど変わっていなかったことに愕然とし、15 年ほど国の予算や大学からの支援で共同参画を推進してきたやり方自体への反省も込めて、再度、頑張らなければと思っているところです。

東北大学の男女共同参画を切り拓かれたのは、法学研究科の辻村みよ子名誉教授（現・明治大学教授）でした。辻村先生が収集されたジェンダー関連書籍 8,200 冊は、和書洋書含め、すべて図書館のデータベースにも登録され、貴重なコレクションになっています（保管と貸出しは男女共同参画推進センターで行っています）。また、本学附属図書館とは学生選書に関して「東北大学サイエンス・エンジェル（SA）」とのコラボレーションをさせて頂きました。SA とは、東北大学の自然科学系女子大学院生の有志で、総長から任命されます。日本では「理系・文系」と分ける入試制度の影響もあり、とくに理系に進学する女性が少ないことから、SA は身近なロールモデルとしてさらに次世代の理系女性を増やすミッションを担っています。

図書館はこれまでも女性が多く参画してきた業界であり、課長クラスの女性も学内の他の部署より多く、女性の図書館長もちらほらと見受けられるようになってきたと思います。そのような意味で、アカデミアの共同参画を推進する女性リーダーや、男性サポーターが図書館からさらに活躍してもらえたらと願います。